

編 集 後 記

1 「数学通信」26 卷 4 号の徳永さんの巻頭言で中谷宇吉郎
2 の随筆「線香の火」が紹介されている。中谷の師、寺田寅
3 彦は、卒業生に向かって、たとえ実験施設が整っていない
4 学校に赴任しても、お金がなくてもできる研究はある、研
5 究を中断してはいけない、継続しなければならない、「線香
6 の火を消しては駄目ですよ」と折に触れ諭していた。寺田
7 の線香花火という備忘録を読むと、なぜ寺田はこのように
8 諭したのかその背景が垣間見える▼中谷は寺田の諭告を
9 敷衍させた随筆を書いた。その中で中谷は「研究者として
10 成熟した人は、線香の火を消さなかった人である。(中略)
11 しかし科学をやった以上は、やはり研究者となるのが本筋
12 であって、他の方面はいわば傍系である」と指摘している。
13 中谷一流の刺激的筆致とはいえ少々トゲが刺さる。巻頭言
14 は、中谷随筆の本質はそのままにトゲを軟化させた現代数
15 学版、徳永版になっていておおいに共鳴できた。巻頭言を
16 読んで、自分版「線香の火」を思い起こした方も多いただろ
17 う▼編集後記を書いたことで「せんこうのひ」の漢字変換
18 が「専攻の日」やら「選考の日」から「線香の火」になっ
19 た。傍系だらけの我が身を振り返ると、漢字変換だけでも
20 傍系から脱却できたことはせめてもの慰めである。(編集
21 部)